

# 社会の岐路に立ち向う

文：横山真弓（野生生物保護学会副会長）



野生動物の増加による様々な問題が深刻化しています。しかし、歴史を紐解くと、古くから日本人の生活に深いかわりを持つていた野生動物は、その資源的価値の高さから、高い捕獲圧にさらされ、昭和初期に絶滅に瀕しました。その後の燃料革命、化学繊維の台頭により、日本人は、木材や野生動物を利用しなくても生活することができるようになりました。それから50年以上が過ぎ、放置された里山林は広葉樹林として成林し、人が撤退した里山林では、人による捕獲圧もなく、野生動物たちは見事にその数を再生していきました。この間、人は森や野生動物と関わりを持たなくなり、農業者たちが被害に苦しむまで、この森の中の劇的な変化を察知することもできませんでした。同時に、社会は、被害をもたらす野生動物に対峙する力や集落内の環境を維持する力までも失ってきています。今、日本の森林では、樹木も野生動物もかつてないほど豊かになっていますが、人間社会はこの状況にどのように立ち向かうのか、大きな岐路に立たされているといえるでしょう。本学会もこの事態にどのように立ち向かうのか、将来構想を通じて多くの議論があり、今年も、まさにそれらを実現するための取り組みが進められています。



六甲山の森林内。明治末期には、「禿山」となった六甲山は、今では多くの野生生物をはぐむ森林へと成林している。